
とある転生者の崩壊道（ブレイクロード）

Sankusu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある転生者の崩壊道
フレイクロード

【Nコード】

N7497Z

【作者名】

Sankusu

【あらすじ】

気がつくときと真つ白な空間、そして神と名乗る奇妙な人間？そうか、これが転生ってやつか。とあるシリーズに転生した一人の少年、楠木和真。彼が関わっていくことで少しずつ物語が変わっていく。渦巻く陰謀、落ちる涙。果たして、和真は自分の大切なものを守れるのか！・・・といったことはなく、だらけた生活を書いていく予定です。ちなみに主人公チートです。これが処女作なので、暖かく見守っていただけるとうれしいです。アドバースなどをくれたらもっとうれしいです。

転生！？（前書き）

初めてで、拙文ですがどうぞ。

転生!?

目が覚めると、真っ白な空間だった。

「……どこだよ此処は?」 そう思っていると、

「此処は天界みたいなところじゃ。」

「うわっっ!?!?」

後ろからいきなり声をかけられたので、思わず身構えてしまった。

「なんじゃ、意外とびびりなのか?」

「……誰だよあんた。」

「わっちは世間で言う神というやつじゃ。」

「……神?それにわっち?」

「そっちは気にするな。ただのくせじゃ。それより、お主今の状況が解るか?」

「まったく何も解らん。」

「やはりか……。まあ簡単に言うとお主は死んだのじゃ。」

「……………は？」

「いきなり言われても理解できんか。まあなんで死んだのかと言ひつゝ、」

「こちらのミスでお主を死んだことにしてしまったんじゃないよ。」

「……もっと訳が解らん。死んだことにしたって何だよ。」

「お主此処に来る直前、何をしていたか覚えているかの？」

「確か昼飯を食っていたはずだが、それが？」

「うむ。その昼飯に食っていたパンを誤つてのどに詰まらせたことにしてしまったの。」

「それでお主は死んで、今に至る。」

「……パンをのどに詰まらせるってあんま聞いたことねえぞ。まっ、とりあえず俺は死んだわけね。」

「なんかあつさりしてるのお。まあいい。とりあえず死なせてしまったお詫びとして、」

「違う世界に転生させてやろう！」

「何でそんなにテンション高いんだよ……。」

「さあさあ、どこにするんだい！！」

「それにしても、まさか転生が俺におこるとはなあ。まあ嘆いてもしゃあないか。」

となると、原作知識をある程度知っているほうが何かと便利だよな。

「それなら、とあるシリーズの世界で。」

「ほうほう、とあるシリーズか！いいのお！

ちなみにわっちは神裂ねーちゃんが好きじゃー！！」

「んなこと誰も聞いちゃいねーよ。」

「それで、どんな能力が欲しいかの？」

「は？能力？」

「あんな世界に行くんじゃ。あつたほうが安心じゃろ。」

言われてみればそうか。となるとどんな能力がいいんだ？

うーん、原作はあまり壊したくないからな。

表向きは普通の能力であとはチートにしてもらうか。

「なら、白井黒子ぐらいの瞬間移動で。それを普段の能力としてふるまう。」

あとは、ナルトの永遠の万華鏡写輪眼、もちろん普通の写輪眼もな。

それと忍術全般、学園都市に存在するすべての能力、

あとはワンピースの覇気全部かな。」

「……意外と欲張りじゃの。」

はっ！第二の人生なんだ。これぐらいあってもいいだろう！

……自分で少し多いなとも思っているが。

「まあ死なせてしまったから、それぐらいならいいんじゃないの。」

あとは、年齢と性別じゃがどうする？」

そうか、年齢とかがあったか。年齢は上条さん達と関わるなら同じ年がいいか。

そっちの方が動きやすいだろう。性別は変えるつもりはない。

「なら、年齢は16歳、性別は男で。」

「年齢は16、性別は男じゃな。よし、登録できたぞ！」

……登録って何だよ。それはさておき、学園都市か。ヤベえ、なんかテンションがあがってきた！

「それじゃあ、学園都市に飛ばすぞ、よいな？」

「おう！ドンと来い！」

こうして、一人の転生者が物語りに介入していく。

「ちなみにわっちもどこか出てくるぞ。」

「何でだよ……！」

大丈夫か、この先の俺の人生。

転生！？（後書き）

タイトルのあれはブレイクロードと読みます。ちなみに、和真の能力とはあまり関係ありません。気が変わったら関係してくるかもしれません。

いきなりの統括理事長（前書き）

どうも、シャンクスです。相変わらずの拙文ですが、よかったらどうぞ。

「……あの野郎、今度会ったらしばいてやる。それと、オ
リジナル能力だと？」

どんな能力だ？あとで確かめてみるか。それより……

「家探しとか、人生初だぞ……。」

新しい世界で初めてやるのが家探しとか……テンション
ただ下がらだよ。

「つーか、どうやって探しゃいいんだよ。」

うーん、てっとり早いのは統括理事長に会うことだよな。」

でも大丈夫か？いきなり会って。最悪殺されるかもしれん。
それだけは避けたい。

この世界では早死にするつもりはないぞ。

……もとの世界でも死ぬつもりはなかったけど。

「……まあ、殺されることはないだろう。」

よし！なら思い立ったら吉日ってやつだな。早速いってみる

か。」

第7学区のとある窓もドアもないビルの中、アレイスター・クロウリーは、

目の前に出ているモニターを見ていた。

そこには、ビルの屋上に突如姿を現した一人の少年が映っていた。

「……………」

すると、その少年が今度は自分の目の前に姿を現した。

「ハロハロー！」

「……………誰だ。」

「おいおい、人のことを聞く前にまず自分の紹介だろ。」

なあ、魔術師アレイスター・クロウリーさん？」

「……………すでに私のことを知っている者に自己紹介をしてなんになる。」

「ははっ！それもそうだな。」

「で、君は誰だ」

「俺は楠木和真。出身地、その他もろもろは答えられない。」

「楠木和真……。それで、目的は何だ。」

「目的か……。まあまずは家だな。」

「家……？」

「ああ。実は学園都市に今さっき来たばかりだな。

しばらくここにいるつもりだから住むところが欲しい、できれば第7学区内で。」

「そうか。それで本当の目的は？」

「今言ったこと無視かよ……。」

「この映像に映っているのは君だろう？」

映像だけでも君が普通じゃないのがわかる。

そんな人間に家をやるなんておかしいだろう。」

「今度は変人扱いかよ・・・まあ家が真の目的ではねえけど。」

「なら何だ。」

「まずはここに住むこと。それからことは何も考えていない・・・どうしたらいい？」

「私に聞くな・・・ふう、まあいいだろう。」

だが、君がここに住んで私になんのメリットがある？」

「ああ・・・なんだろうな。とりあえずは暗部の仕事を引き受けたりしよう。」

「それは君にデメリットしかないんじゃないのか？」

「確かに。俺も死ぬつもりはない。だが、何も無いのもつまらない。」

俺は刺激がある人生を楽しみたいからな。」

「なるほどな・・・まあいいだろう。」

それで、最初は家だったかな・・・そうだな。

では、ここから南西に見えるあのマンションの20階から27階をやるう。

ちなみに各階の部屋数は10部屋だ。」

「・・・あんた馬鹿か？どこに一人で80部屋使う奴がいたんだよ。」

「全部使わなくてもいい。あそこは空き部屋が多くてな、処理に困っていた。」

家賃は払わなくもかまわない。」

「・・・結局いらねえもんを押し付けられただけじゃねえかよ。・・・まあ、それだけいい家を貰えたからありがたいけどな。」

「次に暗部のことだが、こちらから君の携帯に連絡する。それ以外の時間は自由にしてもらっても構わない。」

「分かった。それと俺の学校とレベルは？」

「学校は海星学園、学園都市でも5本の指に入る学校だ。レベルは、表向きはレベル4の瞬間移動にしてもらう。レベル5と公表して変な騒ぎでも起こされたら面倒だからな。暗部では、コードネーム「デビル」、つまり学園都市第零位として働いてもらう。」

「(第零位？デビル？そんなもんあったっけか？)分かった。」

「なら今日はもう帰っていい。家の鍵はそこにおいてある。」

「ああ。サンキューな」 和真は瞬間移動を使って外に出た。

(・・・楠木和真か。面白い存在が出てきたな。)

そしてビルを出た和真は、あてがわれたマンションに向かっていた。

(ふう・・・死ぬかと思った。

何だあの威圧感、完璧に殺すつもりだったんじゃないか？

まあ話がまとまってよかった。・・・割りとガチでよかった
と
思
っ
て
る。

まあこれで最低限生きていけるようにはなった。

さて、これからどうやって原作に関わっていくかな。(

いきなりの統括理事長（後書き）

結局、タイトルのあれを能力にすることにしました。どういう能力にしようか悩んでいます。多分、次は人物設定なのでそこで発表したいと思います。

新しい家と人物設定（前書き）

予定していた通り、人物設定になりました。ただ、和真のオリジナル能力が訳のわからないものになってしまいました。すいません。

新しい家と人物設定

第7学区のとあるマンションの2705室、和真は呆れていた。

「何だこりゃ……」

そこは、だだっ広いリビングに洋室が7部屋、さらにはテレビが4つもあるという

どこかの社長さんが住むような部屋だった。

「アレイスターの野郎、これはもはやいじめのレベルだろ……しかもこれがあと79部屋もあるし。」

全部がこの部屋と同じだとは思わないが、それでもなあ。」

ベランダに出てみると、どういう構造をしているのかなぜかプールがあった。

「はあ……とりあえずこれは置いといて、俺の能力だな。」

ここに来る前、少し能力を試して見たが、何だこの能力は。

能力名は崩壊道ブレイクロードだったかな。

その能力は自分がこれまで歩んできた道とこれから歩んでいく道、つまり過去と未来を塗り替えて現在に変化をもたらす能力らしい。

……自分で言っても訳がわからん。あれか、

例えば俺は能力が使えないという過去を能力が使えるという過去に塗り替えれば

俺は能力が使えるみたいなことか？あまり理解できないが、まあいい。

だが未来を変えるってなんだよ、某ネコ型ロボット漫画かよ。未来変えてどうしろってんだ。

・・・というよりこんな能力なら神から色々もらった能力無駄じゃねえかよ。

「この環境でこれから生活していくのかよ。不幸だ・・・。」

人物設定

名前：楠木和真

性別：男

容姿・性格：世間で言うイケメン。ジャーニーズみたいなイケメンではなく、

エグザイルみたいなイケメン。髪は、ナルトのうちはサスケみたいな髪型で、

色は少し茶色がかった黒。何事にもやる気がまったく無く、他人に興味が無い。

だが、自分に有益になること、面白いと思ったことには誰に

も負けない

テンションの高さを見せる。命をむやみやたらと奪うことはないが、

信念が腐っている者（と言う建前で実際は自分が気に入らないやつ）は

ためらいもなく惨殺する。好きな物はイチゴ牛乳と他人の不幸。

嫌いな物は食べ物だとトマトとチーズ、人間だとうるさい奴と自分自身を

否定する奴。

もとの世界のと看から喧嘩は強く、能力の発生に伴い身体能力は聖人を

凌駕するものになった。弱点は左脇腹（もとの世界での傷が残っているため）。

両親はともて他界しており、学園都市では置き去りとされている。

能力：崩壊道
ブレイクロード

自分がこれまで歩んできた道、これから歩いていく道（過去と未来）を塗り替えて

現在に変化をもたらす能力。この能力は他者に使うことも可能で、

例えば相手の未来をあと5秒後に死ぬというものに変えれば、その相手は

5秒後に死ぬことになる。遺体が完全な状態であれば生き返らせることも可能。

これを応用して、すべての能力・魔術が使える。

さらに、神から写輪眼（永遠の万華鏡写輪眼）と忍術、覇気をもらっている。

新しい家と人物設定（後書き）

本当に訳がわかりませんね、この能力。自分で読んでても、はあ？
と思いました。こんな能力を持つちゃって、この先どうすればいい
でしょう。

邂逅（前書き）

ところどころ変な部分があるかもしれませんが、あと、今回は能力は出てきません。

邂逅

「何ででこうなった……。」 和真は、嘆きながらある場所へと向かっていた。

今から10分程前……

ピリリリ…… 「ん？アレイスターか？」 和真は携帯に出ている

番号を確認し、電話に出る。

「もしもし、もう仕事のオーダーかよ。人使いが荒いねえ。」

「今回は違う。いや、捉え方によっては仕事かもな。」

「はあ？」

「実は、君を風紀委員にしておいた。」

「……は？」

「いやなに、最近この学区の治安が少し荒れてきていてな。人手が足りなかったんだ。」

「いや、だからって何で俺？」

「それじゃ頼んだぞ。ちなみに一七七支部だ。」

「勝手に話を進めるな!!」

.....

「はあ。俺あいつになんかしたか？完璧に嫌がらせだろ。
マンションのことといい.....」

この世界に来てから疲労しか溜まってない気がする。はあ、
癒しが欲しい。

（しかも一七七支部って御坂たちがよく居る場所だろ。まだ関
わりたく

なかったんだけど。だがアレイスターの言うこと聞かねえと
何をされるか「離してください!!」.....今の声聞いたこと
があるような.....）

辺りを見回すと、路地裏で複数の男共が一人の少女を取り囲
んでいた。

（.....昼間っから何やってんだあの男共。

面倒事増やすんじゃないえ.....って、あの囲まれてる奴って
まさか.....）

少女はどうすればいいか、分からなくなっていた。

「お嬢ちゃん可愛いねえ、その頭の花飾りも。俺たちがもっと可愛いもの

買ってあげるから一緒に遊びに行こうよ。」

（どうしよう。こんなときに限って腕章落としちゃうし……。

「ねえいいじゃん。お金なら俺たちが「おい。」「……ああ？」

頭に花飾りをしている少女、初春飾利は、
一人の少年がこちらに近づいてくるのが見えた。

「なんだてめえは？殺されてえのか。」

「予想通りの言葉をありがとう。だが予想通りすぎてつまらねえな。」

「何だどこの野郎!!」

「つつっ！逃げてください!!」

初春の叫びもむなしく、男はすでに少年の前で殴りかかっていた。しかし……

「がつ!!」

倒れたのは少年ではなく、殴りかかった男の方だった。

「へ・・・？」

初春は驚いた。いや、初春だけではない。その場に居る全員が驚いた。

何もしていないのに、少年に殴りかかった男が倒れ、しかも気絶しているのだ。

「なっ！てめえ、何をした!!」

「何をしたって・・・ただ殴っただけだよ。つーか一発殴っただけで気絶するとか、

もうちょっと身体鍛えろよ。」

初春はさらに驚いた。あの少年はただ殴っただけだと言っている。だが、初春はその殴った動作がまったく見えなかったのだ。

「さて、一人は潰した。あとは何人かなあ？」

「ひい!!」

およそ30秒後、通報を受けたツインテールの風紀委員、白井黒子は

現場に到着した。

「ジャツジメントですよ！おとなしく……って、被害者は初春でしたの？」

「白井さん！すいません、腕章を落としてしまって、それで……」

「そうでしたの。まあ怪我がなくてよかったですわ。

「……ん？怪我がない？初春、暴漢達は？」

「それが、あの人全部倒してしまって……」

「あの人？」

白井は、初春が向いている方向を見た。するとそこには、倒れた複数の男と

一人の少年が立っていた。初春が言っていたあの人とは、あの少年の事だろう。

すると、少年はこちらに気づいたのか、近づいてきた。

「風紀委員か？」

「え、ええ。風紀委員第一七七支部の白井黒子と申します。同僚を助けていただきありがとうございます。」

「いえいえ。あっそうだ、これお前のじゃねえのか？」

そう言うと、少年は初春に腕章を見せた。

「あっそうです！ありがとうございます！それにしても、
何で私のだと分かったんですか？」

「拾ったらあまり汚れてなかったんだよ。ということは
落としてからまだ時間はそれほど経っていない。持ち主はこ
の近くに居るはず。」

だが回りを見てもお前と男共以外誰も居ないから、その内の
誰かになる。

かといって、あの男共の誰かが風紀委員とも思えねえし。だ
としたら

残っているのはお前だけってわけだよ。」

「おお〜！すごいですね！」

「あの、助けていただいたところ申し訳ないのですが、
事情聴取をさせていただきたいので一緒に支部まで来てもら
えませんか？」

「ああ、いいぞ。俺もちょうど行くところだったしな。」

ジャッジメント
風紀委員一七七支部内

「という事は、報告に受けていた移動して来る人とはあなた

のことでしたの?」

「ああ。楠木和真だ、宜しくな。」

「先ほど言った通り、白井黒子ですの。こちらは同じ支部の初春飾利ですの。」

「初春飾利です。先ほどは助けいただきありがとうございます。」

「それで、あの暴漢者たちをどうやって倒したんですの?」

「どうやってって・・普通に殴っただけだけだ。」

「ですが、初春はあなたが殴ったところを見ていないそうなんですの。」

「そうなのか? うくん、本当にただ殴っただけなんだが・・・(こつちに来て身体能力上がったのか? 殴ったとこすら見えないってどんだけだよ。)」

「そうなんですの? まあいいですわ。あなたのことはこれから知っていくでしょうし。」

それより、今はあなたには始末書を書いてもらいますわ。」

「・・・は?」

「いくら助けたといつても、あなたは今支部を移動している最中。」

どこの支部にも属さない人は風紀委員とは言いませんの。

それ以前に、あれはやりすぎですの。」

「……マジっ？」

「マジですの。」

こうして、風紀委員としての生活が始まった。

「不幸だ……。」

邂逅（後書き）

・・・黒子のしゃべり方ってこんなでしたっけ？なんだかよく分からなくなってきました。

暗部の仕事と増える家族（前書き）

どうも、sankusuです。なんかぐだぐだになってしまいました。人との会話作るのへたくそすぎますね、私。

暗部の仕事と増える家族

始末書を散々書かされ、ようやく解放されたのは一時間後だった。

「……吐きそう。」

和真の周りには、行き交う人々がドン引きするほどの黒いオラが漂っていた。

「転生してまだ三日しか経ってねえのにこの疲労かよ。やっぱり死んだままのほうがよかったかもしんねえ。」

そうやって、一人でぶつぶつ言いながら歩いていると、携帯が鳴った。

「……。」

和真は無言で電話に出た。

『楠木、仕事のオーダーだ。』

「……疲労の元凶がまた疲労を持ってきやがった。」

『仕事の内容だが……。』

「やっぱり俺の言葉はスルーかこの野郎。」

和真は第十五学区のとあるビルの前にいた。

「・・・こんなでけえビル全部探して回れってか？やっぱあいつ俺のこと嫌いだろ・・・。」

・・・

『今回の仕事は、十五学区のとあるビルにいる雑貨稼業デパートの始末だ。』

「・・・なぜ雑貨稼業デパートを殺る？あれは必要なもんじゃねえのか？」

『実はそいつがなにやら妙なことをしようとしているようだな。動かれる前に摘んでおくことにした。』

「そうですかい。だが何故俺なんだ？その程度のことなら俺である必要はないだろ。」

『他の奴らには他のことをさせている。それに、君の初陣を早めにして暗部の仕事に慣れさせておく必要もある。』

「はぁ・・・分かったよ。それで、雑貨稼業デパートは

そのビルの何階に』では、頼んだぞ。』まだ話してんだろう
が……」

……

「はぁ……もうテンション上げてくしかねえよな。
よし！殺るぞー！！殺ってすぐ帰って寝る！！」

そうして和真は、意気揚々とビルに入ってしまった。

十五学区のとあるビルの二十階の一室、デパート雑貨稼業はパソコン
を見ていた。

そこには、最近現れたという第零位のことを書かれていた。

すると、部屋のドアが開き一人の少年が入ってきた。

「おやおや、お客さんとは珍しい。」

少年を見て、デパート雑貨稼業は商売人モードになった。

「ふん、いい趣味してるな。」

少年の目線の先には、水晶で作られた髑髏が置いてあった。

「それがいい趣味なのかい？変わってるね、あんた。どうして
もというなら

売ってやってもいいがな。それより、なにをお求めかな？」

「とりあえずリストを見たいんだが。」

そう言われた^{デパート}雑貨稼業は、奥から2、3枚の紙を持ってきた。

「お勧めはメタルイーターかな。RPG7つつばかげた物もあるが？」

「そうか・・・それより、あそこのも売っているのか？」

和真の見た先には、ぐったりとした少女がいた。

「ん？ああ、あれはダメだ。俺もこういうことをしている限り、
お客には最高の商品売りたいたいでね。あんな欠陥品は売れないな。」

「そうか・・・」

「それよりあんた知ってるか？第零位の話。

なんでもあの統括理事長お気に入りらしいぞ。」

そう言っつて、^{デパート}雑貨稼業はパソコンの画面をこちらに向けてきた。

「お気にいりねえ・・・まあそいつのことは結構知っているぞ。」

と言つより誰よりも知っている。」

「本当か！少し教えちゃくれねえか？」

「ああ、いいぞ。名前は楠木和真、あの名門校海星学園に在籍している。」

「へえ、嘘を言っている感じじゃねえな、本当に知っているのか。

すげえな。もしかして今どこにいるのかとも知ってんのかい？」

「ああ、もちろん知っている。今そいつは……お前の目の前にいる。」

「は……？」

雑貨稼業デパートが疑問符を浮かべた瞬間、雑貨稼業デパートの頭が吹き飛んだ。

和真は雑貨稼業デパートの死体を暗部の処理班に任せた後、倒れていた少女に近づいた。

「……っ。」

（……かすかだが、何かを言っているな。これだけの傷を負

っているのに

しゃべる気力があるとは。なかなか見所があるな、この女。(

和真は少女の顔に近づき、

「ここで死なすには少し惜しい人材だ。俺はお前が欲しい、だが決めるのはお前だ。」

俺と一緒に来てみるか？」

少女は何も言わなかった。ただこちらをまっすぐ見て、首を縦に振った。

それを見た和真は、少し笑ったあと、

「俺は楠木和真だ。これから宜しくな。」

・・・

「ああ懐かしきわが家、やっと帰ってきたぞ。」

あのあと和真はビルを後にし、あの少女、久我山凜と家に帰っていた。

どうやらこいつは置き去りらしく、上層部に利用されてあの雑貨稼業デパートのしたについていたらしい。そしてあの有様だったというわけなんだが……

（なんか納得いかねえな、学園都市の上層部とやらは。あとで根絶やしにしとくかな……。アレイスターに何言われるかわかんねえからやんねえけど。それより、まさか俺が人助けとはなあ。元の世界じゃ考えらんねえな。）

和真が色々考えていると、凜が話しかけてきた。

「えつと……助けていただきありがとうございます。」「

「ん？ああ、別にいいよ、感謝の言葉なんか。俺の気まぐれだから。」「

テンションが高くなかったら助けてないだろうし。

「でも、社会のごみの私なんかを助けていただいて、何度お礼を言っても足りないくらいで……。」「

「はあ……だから別にいいって。それと、敬語も使っちな。家族に他人行儀とか馬鹿馬鹿しいしな。」「

「えつと……家族？」「

「ああ、言ってなかったか。アレイスターに言ってお前を義妹にしてもらった。」「

これでお前はもう一人じゃない、安心しろ。」

「えっ!!!……でも、何で私なんかを家族に……」

「お前のことを少し調べたんだが、お前置き去りなんだろう？」

「……。」

「俺も、置き去りだ。」

「えっ!!」

「だから、お前の苦しみは痛いほど分かる。」

俺はそういう奴は見過ごせないタイプだな。(ほとんど嘘だ
けど)最初に言っただろ？」

ただの気まぐれだって。だから感謝も気遣いもいらん。
敬語もなしだ、自分らしくいる。」

「っ!!!……ありがとう。」

「よし、それでいい。だが泣くな、わめかれるとうざい。」

「別に泣いてないよ!!」

「やっと声が出てきたな。」

「むう……あの、あなたのことなんて呼べばいいの?」

「ん?別に何でもいいぞ。お前の好きなように呼べ。」

「えっと・・・じゃあ、和真さんで。」

「ん。それより、お前部屋はどうする？」

「え？」

「べつに俺と同じ部屋でもいいが、どうする？」

「和真さんと同じ部屋！？」

「・・・盛大な勘違いをありがとう。だがそれ以上わめいたら殺す。」

「ひっ！！・・・勘違い？」

「俺が言っている部屋とは、何号室とかのほうだ。」

「何だそつちか・・・。」

何がっかりしてんだよこいつは。

「うん・・・やっぱり同じ部屋がいいなあ。」

「ん、分かった。」

「ん？同じ部屋でもいいって言うてるけど、和真さん何部屋持ってるの？」

「二十階から二十七階まで全部。」

「……………」

夕食を食べ、凜が寝たあと、和真はアレイスターと話していた。

『とりあえずは、お疲れと言っておこう。』

「誰のせいで疲れてると思ってんだこの野郎。」

『何のことだ?』

「はあ……それで、何のようだ。」

『あの少女についてだ。』

「…………凜のことが。」

『そうだ、あの少女の能力についてだ。』

「能力?」

『君ほどではないが、変わった能力だね。あの子は所謂原石と言っものだ。』

「原石だと?」

『そうだ。能力名は自然還元^{ナチュルリダクシヨ}。第七位に次ぐ原石だ。』

「……マジかよ。あいつそんなに凄かったのか。」

『そして、それを君は家族にした。その意味が分かるかい？』

「……。」

『君のことだから心配はないと思うが、あの子の価値がどれ程のものを覚えておいて欲しい』

「……関係ねえな。」

『？』

「あいつが原石だろうが何だろうが関係ねえ。あいつはもう俺の家族だ。」

価値なんつー馬鹿みたいなモンでまたあいつを酷い目に遭わせた奴は、

誰であろうと片っ端からぶっ殺していく。たとえお前でもだ。それを覚えておけ。」

『……君がそんな性格だったとはな。』

「俺もびつくりだ。人助けなんてやるとは思わなかった。だが、助けたという

ことに後悔は微塵もない。」

『……ふん。』

「・・・何が可笑しい。」

『やはり君は面白い。私の予想のはるか上をいく存在だ。』

「そりゃどうも。」

『では、原石は君に任せる。』

「ああ。」

(・・・いらんことばっか言い過ぎたー！！いや、家族になっちまったから

そりゃ守るが、ぶっ殺すとかやばいよな。学園都市全体に喧嘩売ってるような

モンじゃねえか！ああ、さよなら俺の薔薇色の人生・・・。(

「うるさいなあ和真さん。」

暗部の仕事と増える家族（後書き）

やってしまった。ノリで新しいキャラと能力を作ってしまった。本
当にどうしましょう。それ以前に、この駄文どうしよう。

疲労少年とビリビリ姫と不幸少年（前書き）

どうも、シャククスです。何か時系列が少し解らないです。この話が何日かも解りません。

疲労少年とビリビリ姫と不幸少年

凜が家族になって少し経った。凜がどんな奴か見てきたが
・・・こいつ本当に中学生か？

料理の腕は一級品、ミシュランで三ツ星取れるぐらいだ。頭の良さもやばい。

IQはおよそ180以上、射撃訓練をさせても、一時間でプロを凌ぐ腕になった。

(ちなみに和真達の横二部屋は射撃訓練場にした。) そして一番謎なのが・・・

「お前のその能力何なんだよ・・・。」

凜の能力、ナチュルリダクション自然還元だっけか？この能力仕組みはよく

わからないんだが、要は自分の周りにある物質を何ちゃらエネルギーに還元して

自分に取り込み、身体能力を上げたり、傷を回復することが出来るらしい。

「つーか、そんなすげえ能力持つてんのに、
何で雑貨稼業デパートの下なんかにいたんだ？」

「だって・・・逃げたら何されるか分かんなかったし・・・。」

まあ、あの時のこいつがそんなことはできねえか、気が弱そうだったし。

「それに、あそこにいたから和真さんに会えたわけだし・・・」
「・・・何顔を赤くしてんだこいつは。確かに可愛いが、それだけだな。」

俺は恋愛などには興味はない。

「まあ確かに。俺もお前と会えてよかったし。」

「なっ！！」

だがこの赤くなった顔を見るのはいいな。癒される。
アレイスターのせいでここんどこ疲労しか溜まってなかったからな、

こついう癒しを俺は求めていたんだ！

「・・・どうしたの？和真さん。」

「いや、なんでもない。それより、今日は風紀委員ジャッジメントの仕事があるから昼飯は作なくていい。」

「え、ああうん・・・ねえ、風紀委員ジャッジメントって面白い？」

「ん？面白いわけがねえだろ。半ば無理やり入れられたしな。」

「ふうん、そうなんだ・・・。」

「？じゃ、俺行くから。」

「えっああうん分かった。行ってらっしゃい。」

ボタン。

「……ジャッジメント風紀委員かあ。」

「うーん、そろそろツンツン頭とかビリビリ姫と接触したほうがいいよな。」

でもビリビリの方は白井達と一緒にいりや会えるだろう。となると上条さんか……。」

和真は第7学区内を歩いていた。実は凜に言ったジャッジメント風紀委員の仕事が

あるというのは嘘で、と言うのも嘘で、ただ単に面倒くさいだけなのだ(、

本当の目的は先ほど言っていた人物に会うためである。

「だが、どこに行きゃいいんだ？寮の場所あんまよく覚えてねえし……。」

「つか、寮の場所明確に記されたことあったっけ？」

「寮がわかんねえなら、あの金が飲まれる自販機がある公園に行くか。」

あそこなら場所も分かるしな……って、ありゃ？」

と、和真は少し先にいるある人物を見て止まった。

そこには、常盤台中学の制服を着た美少女がいた。

第7学区の路上、とある少女は悩んでいた。

(うーん、今日一日はやることはないのよねえ。

雑誌は昨日全部立ち読みしちゃったし……って、何こいつら……)

気がつくと、少女の周りには取り囲むように男達が立っていた。

和真は目的の人物を見つけた。

「……こんな簡単に見つかっていいのか？というか、俺的には上条さんのほうがよかったんだが……まあいいか。」

そうして、目的の人物である少女に近づこうとしたら、その

少女が

男達に囲まれて路地裏に行かれた。

「……なんでこの奴らは白昼堂々あんなことをするんだよ。というか、

あいつも毎度毎度あんな奴らに絡まれて嫌になるんじゃないかこの町が。」

そして、和真も路地裏に近づいていった。

「お嬢ちゃん可愛いねえ、しかも常盤台じゃんか。今から俺たちと遊びに行かない？」

複数の男に囲まれた少女は、怯えることもなくむしろ呆れていた。

（はぁ……いつになったらこの手の馬鹿は消えるのかしら。いい加減対処するのも飽きてきたんですけど。）

心底呆れている少女はさっさと片付けようと思ったが、一人の少年がこちらに歩いてきた。

（誰よあいつ、もしかして助けに来たみたいないな感じかしら？ そうだとしたら迂闊に攻撃できないじゃない。）

そして男たちも少年に気づいた。

「何だお前は？何のようだ。」

「黙ってるカス。ちょっとアドバイスをしようと思ってな。」

「何だと！！」

「てめえら、女一人を囲んで恥ずかしいと思わんのか？」

(へえ、あの馬鹿みたいな奴がまだいたんだ。なかなかかっこいいじゃない。

この町の男も捨てたモンじゃ・・・)

「大体、こんなちんちくりんの餓鬼を囲んで、てめえら揃ってロリコンですか？」

ああ～いやだねえ。」

「この野郎！好き勝手言わせておけば！！！」

(・・・前言撤回ね、やっぱり捨てたほうがいいわ。もう全員やっちゃおう。

特にあいつを集中的に！)

そう彼女が心の中で決意したあと、彼女の周りが電撃で包まれた。

「ふう、まあストレス発散にはなったわね。」

なんか疲れたわ、もう帰って寝ようかしら？」

と言って、そこから立ち去るつとすると……

「あゝあ、こりやまたひでえな。」

「っ！！」

後ろを見てみると、さっき集中的に電撃を浴びせたはずの少年が

無傷で立っていた。

「……あんた、何者よ。」

少女、御坂美琴は警戒しながら少年に聞いた

「ん？何者って、ただの高校生だよ。」

「嘘つけ！私の電撃食らって、傷どころか汚れもつかない奴がただの高校生な訳がないでしょ！」

「まあ確かに、ただの高校生じゃねえけどな。あと、何か勘違いしてるようだが、

俺はお前の電撃を食らってない。ゆえに傷も汚れもないんだ。

「

「は……？」

「お前の電撃を食らう前にぎりぎりでもよけたんだよ。
・・・本当にぎりぎりだったよマジで・・・」

・・・嘘でしょ。確かに、少し加減したけどそれでも
あの距離で私の電撃をよけたなんて・・・こいつ、本当に何
者？

「つと、自己紹介がまだだったな。俺は楠木和真だ。お前は？
(知ってるけど)」

「・・・御坂美琴よ。」

「へえ、御坂美琴ってあの第三位か。すげえな、
有名人に会っちゃったよ俺(知ってたけど)。
まあそんなことより、怪我ねえか？」

「へ？ああ、うん。」

「そうか、ならいい。それじゃ、俺は用があるからこれで。」

「えっ、いやちょっと!」

美琴は追いかけてようとしたが、すでに少年の姿はなかった。

「ふう、思わぬ形で出会ったが、まあ結果オーライってところだな。」

和真はあの場所を離れ、とある公園の中にいた。

「さて、次は上条さんだが・・・正直見つかる気がしねえ」な
んでだー!」

「・・・マジかよ。」

和真は叫び声が聞こえたほうを向いた。すると案の定、そこには

自販機とファイトしているツンツン頭の高校生がいた。

「・・・もしかして俺ってすごい幸福ラッキーなんじゃねえか？」

ツンツン頭の少年、上条当麻は自販機と格闘していた。

「ちくしょう、何でこの自販機はダメなんだ。」

いや、おれがだめなのか?どっちにしろ、不幸だ・・・。」

上条当麻は肩を落としながら嘆いていた。そして、その場を去ろうとしたら

自販機に飲み込まれたはずの二千円札が突然出てきた。

「お、おおー！ー！ー！ー！俺の二千円札！ー！ああ神よ、わたくしを

見捨ててはいなかったたのですね！ー！おお、ありがたや。」

などと変なことを言いながら変な舞を踊っている上条当麻の前に、

一人の少年が来た。

「……ここまで喜びを身体で表現できる人間はこいつだけだろつ。」

「ん？もしかして、お前が俺の二千円札を救い出してくれたのか！ありがとう！ー！ー！」

「いや、救い出したって……まあそうだけど。」

「そうか！本当にありがとう！お礼にジュースをおごるよ！ー！」

「えっ……じゃあ、お言葉に甘えて。」

「どンドン甘えちゃってくれ！それで何飲む？」

「いや、どンドン甘えるのはごめんだ。あとジュースはヤシの実サイダーで。」

……

「自己紹介してなかったな。俺は上条当麻、当麻でいいよ。」

「俺は楠木和真。和真でいい。」

「そうか。そーいや、どうやって二千円札を救い出したんだ？」

「だから救い出したってなんだよ……まあどうやったかって言っと、

自販機の後ろをいじって誤作動を起こさせたんだ。」

「……へ？」

「ん？あーいや、別に警報とかはならないから安心しろ。

特殊なやり方でやったから、自販機側も誤作動とは認識していない。」

「なんだ、はあ〜よかった。共犯になるかと思った。」

「共犯で……二千円救ったんだぞ俺は。」

「特殊な方法って、能力か何かか？」

「いや、普通に手でいじっただけだ。」

「へえ、すげえんだな、和真って。」

「別にすごかねえよ。お前だって練習すりゃ出来る。」

「そーいうもんなのか？」

「そういうもんだ。・・・おっと、もうこんな時間か」

「なんか用事があるのか？」

「いや、そうじゃないが早く帰らねえと妹がつるさくてな。」

「そうか、じゃあまた今度な。」

「おう。」

そうして二人は番号とアドレスを交換した後、それぞれの家へ帰っていった。

疲労少年とビリビリ姫と不幸少年（後書き）

・・・能力作るのが下手過ぎて笑えてきますね。それと二人に会うのも強引過ぎました。次はやっと本編に入ります。・・・といっても超電磁砲の方ですが。

四人の少女とひとりの少年（前書き）

どうも、シャククスです。やっと原作に入りました。・・・超電磁砲のほうですが。それにしても、三人以上の会話がこれほど難しいとは思いませんでした。

四人の少女とひとりの少年

和真は、第七学区内を歩きながら考えていた。

(今日は確か超電磁砲が始まる日だな。

クレープ食ってたら銀行強盗が起きるんだっけか。

さて、どうやって関わるかな・・・)

などと考えていると、誰かが和真のことを呼んだ。

「楠木さくん!」

「・・・誰だ、まっ昼間からこんな街中で大声で俺のことを呼ぶ馬鹿は。

ああ恥ずかしい、こついつときは無視が一番いい。」

「何で名前呼んだだけでそんなに言われなきゃいけないんですか!」

気がつくくと、頭に花飾りをつけた少女、初春飾利が目の前にいた。

「よう初春、今日も花が眩しいな。」

「えへへ・・・って、別に光ってません!」

「それより、そっちの子は?」

和真が見た先には、初春と同じ制服を着た黒髪の少女がいた。

「えっ！あ、えっと、初春のクラスメイトの佐天涙子です。」

「そうか。俺は初春と同じ風紀委員ジャッジメント一七七支部の楠木和真だ。宜しくな。」

「よ、宜しく願います・・・」

「いや、そんなにかしこまらなくても。」

別に、普段初春と話してる時と同じテンションでいいぞ。」

「いや、それは・・・」

「そうですよ。今日知り合った人にスカート捲りなんて、いくら佐天さんでも出来ませんよ。」

「何だよそれ・・・てか、その言い方だと

こいつがいつもスカート捲りしてるみたいじゃねえか。」

「いつもしてるんですよ！今日だって二回されました・・・」

「そうなのか？」

「いや、その、まあ・・・」

「そうか・・・何色だった？」

「へ？」

「だから、パンツの色。」

「ああ、それですか！それでしたら・・・」

「つて、何教えようとしているんですか佐天さん！

楠木さんも、なんてこと聞くんですか！」

「えっ、いやあ〜ごめんごめん。うっかり誘導されちゃって。」

「いやあ〜ごめんごめん、うっかり誘導しちゃって。」

「うっかりじゃないですよ！というか、なんですかうっかり誘導しちゃったって！」

「まあまあ。それにしても、初春は面白いなあ。」

「ああ。なんというか、いじりがいがある。いじられる才能は抜群だな。」

「私も、最初に初春と話したときそう思いました。」

「何の話ですか！何ですかいじられる才能って！」

「というか佐天さん私と初めて話したときそんなこと思ってたんですか！」

「そんなことより、お前等はどこに行くんだ？」

「そんなことって・・・えっと、私達これから白井さんと会う約束してあります。」

「白井と？」

「そうなんです！あの常盤台のエースで、学園都市の第三位で超電磁砲と呼ばれるあの御坂美琴さんに会わせてくれるらしいんです！」

「ああたのしみだなあ。」

「……初春ってこんな奴だったか？」

「ええっと、まあそうですね。」

「というか、お前は楽しみじゃねえのか？」

「うーん、私は初春に強引に誘われたのでなんとも……」

「そうか（まあこいつはレベル0だしな。あつちは学園都市に七人しかいない

レベル5の第三位。普通なら楽しくならねえか……初春コイッを除いてだが）。」

「そうだ！楠木さんも一緒に行きましょうよ！」

「俺が？」

「白井さんもいますし、大丈夫ですよ！」

「そうか……じゃあそうしよう（はなからそのつもりだったし）。」

「よし、それじゃ出発！」

「元気だなあ初春。」

「お前も大変だな。」

「まあでも、一緒にいると楽しいからいいんですけどね。」

「で、何だっけ？」

常盤台中学の制服を着た二人の少女、
御坂美琴と白井黒子はある人物を待っていた。

「ですから、わたくしの友人がお姉様に会いたいといったら
お姉様がわたくしの友人ならしょうがないと言って会ってく
れると言ったから

今から会いにいくと何度言ったら・・・」

「ああ、長つたらしくてややこしい説明をありがとう。そう
いや、そうだったわね。」

「しっかりしてくださいなお姉様。」

「そんなこと言っても、寝不足なんだし・・・（結局あいつが何者か分からないし・・・）」

それに、なんで私に会いたいのよ？」

「それは、お姉様が常盤台のエースで学園都市に七人しかいないレベル5の第三位なんですもの。会いたいに決まっていますわ。」

「

「そういうもんかしらねえ。」

「そういうもんですわ。・・・っと、どうやら来たみたいですね。」

御坂達のところに少女達が来た。

「と言つ訳で、こちらわたくしの友人の初春飾利ですの。」

「えっと、初春飾利です！宜しくお願いします！」

「あと・・・そちらの方は？」

「どうも、初春のクラスメイトの佐天涙子です。ちなみに、レベル0です。」

「ちょっと、佐天さん！」

「でもさあ〜。」

「そう。私は御坂美琴、宜しくね。」

「……………えっと、宜しく願います」

「そして……何故楠木さんが？」

「俺はさっきこいつらに会ってな。それで一緒に「あー！」
……………何だよ。」

「あんたこの前の！」

「お姉様、楠木さんとお知り合いで？」

「この前、不良共に絡まれたときに割り込んできたのよ。」

「そうでしたの……………って、怪我はなかったんですの!？」

「まあいつもどおり軽く殺ったわよ。」

「そうではなくて、楠木さんは平気でしたの!？」

「ああ、それね。そう、そこが問題なのよ。」

私の攻撃範囲にいたのに、傷どころか汚れすらなかったのよ
コイツ。」

「「「……………」」」

何だこの沈黙は。何故だか分からんが
俺の動物的勘が耳を塞げといつているんだが……

「「「え〜っ!!」」」

ぐはっ!!おれの勘はあたっていたか、こいつらつるますぎ
んだろ!

「お前等煩せえんだよ!!耳やられるだろうが!」

「ですが、お姉様の攻撃をかわすなんて!」

「一七七支部ではぐうたらしてるだけなのに!」

「この人ってすごい人なんだ……」

「本当に何者なのよコイツは……」

……ちくしょう、誰か俺の耳をいたわる奴はいねえのかよ。
最後の言葉に関しては敵意丸出したろ……。

「お前等、これ以上騒ぎやがったら叩き潰すぞ。」

「「「……………」」」

よし、素直でよろしい。素直が一番だぞ。……御坂以外
な。

「傷がないつつつても、それは俺がちゃんとコイツの電撃を避
けたからだ。」

「だから、それがすごいんじゃない。」

「べつにすごかねえよ。訓練すりゃ誰だって出来る。」

「そんなわけないじゃない。」

「まあまあお姉様。それより、これからどこにいくか決めませ
んど。」

「そうだぞ。つたく、誰のせいでこんな話になったんだか。」

「」「」「……」「」「」

「……なんだそのジト目は。俺はMじゃねえから興奮しねえ
ぞ。むしろ殴りたくなる。」

「はぁ……まあそれもそうね。」

「で、どこに行くんだ?」

「うーんそうねえ、とりあえずゲーセンいこっか。」

「……ゲーセン？」

「……お姉様……。」

「はあ、コイツ本当に常盤台のお嬢様か？」

「な、何よ。別に嫌いじゃないでしょ！」

「そういう問題じゃねえんだよ……とりあえず、ゲーセンはなしだ。」

「じゃあ、どこがあんのよ？」

「そついや、さつきチラシをもらったっけ。」

そういつて、和真はチラシを出した。そこには、最近この辺りに来ている移動販売

のクレープ屋の宣伝が載っていた。

「あっ、この公園、すぐ近くですよ。」

「いいじゃないですか。ここにいきましょつよ！」

「わたくしはいいですわよ。お姉様は？」

「うん？私も別にいい……っ！！」

「……どうした御坂？」

御坂はチラシをみて固まっていた。より正確に言うと、チラシの一点を見つめて

固まっていた。そこには先着百名様にカエルのマスコットキャラクター、

ゲコ太のストラップをプレゼントと書いてあった。

(そっぴゃ、こいつこのカエルが好きだったんだっけ。)

美琴はしばらくチラシを持って震えていたが、いきなり飛び上がった。

「今すぐここにいくわよ！全速力で！！」

「お姉様……。」

「御坂さん、そんなにクレープがたべたいんでしょうか。」

「いや、多分ストラップが目当てだと思っよ初春。」

「……ゲコ太馬鹿って呼ぼうかな。」

四人の少女とひとりの少年（後書き）

すいません、銀行強盗までいきませんでした。会話の部分下手糞過ぎて無駄な部分多すぎますね。本当にすいません。

銀行強盗（前書き）

どうも、シャムクスです。・・・戦闘シーンがものすごくグダグダ
になってしまいました

銀行強盗

「うわ、人がかなりいますね。」

「タイミングが悪かったな。」

俺達は今、チラシに載っていた公園に着いたんだが、予想以上に評判がいらしく、人であふれかえっていた。

「これは役割分担した方がいいですわね。」

と言う訳で、わたくしは席を確保してきますわ。」

「あっじゃあ私もいきます。佐天さん、私のクレープお願いします。」

「えっちょっと、初春！」

気がつくのと、並んでいたのは俺と御坂と佐天になっていた。

そして、佐天は落ち着かない様子でどこか緊張してるようにも見える。

それもそうか。レベル5の第三位が目の前にいるわけだし。・・・というか、少しびびってるって感じだな、なんだか泣きそうじゃねえか。

御坂を見るだけでそんなになるとは思わない・・・っつてうわっ！

なんだあの御坂の目は！確実に獲物を狩ろうとしている猛獣の目じゃねえか！

御坂よ、そこまであの力エルが好きか。周りの奴らも少し引いてるぞ。

……佐天にこの空気は耐えられねえな。

「佐天、お前も席を取ってきてくれ。」

「えっ!」

「こっちは二人いれば十分だ。三人もいると逆に他の客に迷惑だろ?」

「えっと、じゃあそうさせてもらいます。……その、ありがとございます。」

「別に礼なんかいらねえよ……俺もあの目はさすがに怖い。」

「あはは……えっと、何か買っておきましょうか?」

「ん、いいのか?それじゃ、イチゴ牛乳でも買っておいでくれると嬉しい。」

「分かりました。」

そうして、佐天はベンチの方へ行った。視線を戻すと、御坂がまだあの目つきだった。

「……御坂、いい加減その目をやめろ。周りの人も怯えてる。」

「えっ！・・・そんなにすごい目つきだった？」

「すごいと言うレベルを超えてたよ・・・
そんなにカエルが欲しいなら、前に来るか？」

「なっ！べ、別に欲しくなんかないわよ。あと、カエルじゃなく
くてゲコ太！！」

「はいはい。つたく、何を隠す必要があんだか。」

「なっ何も隠してないわよ！私の目的はあくまでもクレープよ。」

「分かったから落ち着け。」

などと言い争っていると、クレープが来た。

「はい、どうぞ。ストラップはこれで最後のひとつでしたから、
ラッキーでしたね。」

「えっ！あ、ああ、ありがとうございます。」

そうか、そっぴやこれが最後のひとつだったか！などと考え
ていると、

後ろから何かが崩れる音がした。見てみると、御坂が四つん
這いになって

黒いオーラを大量生産していた。

「・・・あげよつか？」

「い、いいのっ！…!??」

ぐっ！頭に響く声のでかさだ！

「あ、ああ。俺よりお前のほうが似合っしな。」

「はあ〜。」

・・・女神でも見ているかのような表情だな。

そうか、コイツはこのカエルでコントロールできるのか。

「ほら、何ぼさっとしてんのよ。さっさとみんなのところに行

くわよー！」

「……………はいはい。」

「買ってきたわよ〜。」

やっぱり佐天は誰とでも仲良く出来るんだな。
この短時間で既に白井とも打ち解けるとは。

「あ、楠木さん。これ、いちご牛乳です。」

「お、サンキューー！」

「あれ、あんたそういえばクレープは？」

「今はクレープよりイチゴ牛乳の気分なんだよ。」

「と言うか、いつもイチゴ牛乳ではありませんの。」

「そうなの？」

「気がついたらいつもイチゴ牛乳持ってますよね。」

「いいじゃねえか別に。好きなんだよ。俺は一日三食イチゴ牛乳でもいいくらいだ。」

「・・・それは少し危ないんじゃないですか？」

「ていうか、食べ物じゃないし。」

「それはさすがに・・・ねえ初春？」

「いや、その気持ち分かります！おいしいですもんね、イチゴ牛乳！」

「お！お前も好きなのか！」

「はい！そして、最近なんといちごおでんなるものを発見したんですよ！」

「何だと！それどこにあった！」

「確か私の寮の……」

「……話についていきませんわ。」

「何よいちごおでんって。」

「初春がそんなものが好きだなんて……」

これはいい話を聞いた！まさかいちごとおでんを組み合わせるとは、

やるな学園都市。やべっ、よだれ出てきた。

「あれ、そういえば何であそこの銀行昼間からシャッターを閉めているんでしょう？」

「……え？」「」

皆が疑問符を浮かべた瞬間（よだれをたらしている奴は除いて）、
シャッターが爆発した。

「なっ！」「」

「初春は警備委員アンチスキルに連絡を！」

「はい、分かりました！」

「それと楠木さんはわたくしと……って、いつまでいちごおでんで

よだれをたらしているんですの！」「」

「馬鹿野郎！いちごおでんをなめんな！」

「なめてなどいませんわ！そんなことより事件ですよ！あなたもいきますわよ！」

「ん？事件だと？」

そうか、すっかり忘れていた。

「ええ、すぐ前の銀行ですわ！」

まずいな、今はいちごおでんのことしか頭にないんだが・・・
まあ、あの程度の奴らなら大丈夫か。

「分かった、急ごう。」

「おい、さっさとヅラかるぞ！」

男達は焦っていた。強盗が終わってすぐ切り上げようとした
のじ、

すぐ目の前の公園に風紀委員シヤッヂメンの腕章が見えたのだ。

（畜生、なんでこんなに早く風紀委員シヤッヂメンがくるんだよ！）

とりあえず、男達はこの場から逃げようとしたが、男達の前に少女が現れた。

「なんだてめえは！」

「ジャッジメント風紀委員ですの！器物損害、及び強盗の容疑で拘束しますわ

！」

「……ぷっ、はははははは！お前みたいな奴がジャッジメント風紀委員だあ？
はは、こりゃ傑作だ！」

「……。」

「ジャッジメント風紀委員も人手不足かよ！まあいいや・とりあえず死ねやあ！」

男の一人が少女に殴りかかったが、倒れたのは男の方だった。

「がっ！」

「そういう台詞、死亡フラグですわよ。」

「なっ！……ただのがきじゃねえってわけか。」

「当たり前だろうが。うちのツインテをなめんなよ。」

気がつくと、後ろにもジャッジメント風紀委員の少年が立っていた。

「……髪型は関係ないですわ。」

「くそっ！……へへ、俺をなめんなよ……」

そう言うと、男は手のひらに火の玉を出した。

「バイロキネシスト発火能力者……」

「そ、そうだ、俺はレベル3のバイロキネシスト発火能力者だ！

この能力でお前等を吹き飛ばしてやる！」

「出来るんならな。」

「なっ！」

男が振り向くと、すぐ近くに和真がいた。

「残念だが、その程度じゃたりねえよ、俺を倒すにはな。」

そう言うと、和真は目に見えないスピードで男の腹を殴った。

「ぐふっ！」

「……少しやりすぎではありませんの？」

「何言ってるんだ。俺は善良な市民を守る為に「きゃあああ！離してください……！」

「うるせえ餓鬼！……忘れてた。」

悲鳴が聞こえたほうを見ると、子供を抱えた佐天が犯人グループの一人に蹴り飛ばされていた。

「なっ！あの男！！」

「まあまで白井、あれを見る。」

「何を言って……って、お、お姉様？」

そこには、制服にクレープをべったりつけてるという

奇抜なファッションの御坂がいた。

「……ねえ黒子、これって私が個人的に喧嘩を売られたってことでもいいのよね？」

「いや、その……はい。」

そういうと、御坂はポケットから一枚のコインを取り出した。

「お、思い出した。この辺りには、

腹黒でツインテの風紀委員ジャッジメントがいると……」

和真が殴った男が急に語りだした。……こいつ以外とタフだな。

「……腹黒のツインテって、誰のことですか？」

「そして、その腹黒ツインテが夢中になっている最強の電撃使レールガン、超電磁砲！」

「……誰が作った噂かは知りませんが、あなたの言う通りですわ。」

「ま、まさか本当に!？」

おいおい、あなたの言う通りって、それじゃお前が腹黒だっことを認めたまも同然じゃねえかよ。

「そう、あの方こそ学園都市に七人しかいないレベル5の第三位、御坂美琴お姉様ですわ。」

白井がそういうと同時に、超電磁砲レールガンを受けた車が宙を舞った。

「大丈夫か佐天？」

「・・・楠木さん・・・」

事件が終わった後、佐天は落ち込んでいた。まあ、蹴られただけだしな。

「・・・私・・・その・・・」

「お前はすげえなあ」

「え？」

「だってお前がいなかったらあの餓鬼は助かってなかったんだしな。」

「でも・・・私・・・」

「ああ、つたく。くよくよすんじゃねえよ。」

「へ？」

「お前は人一人を救ったんだ、もっと胸を張れ。あと、もっと自分に自身を持って。」

俺は自分自身を否定する奴は大っ嫌いだ。」

「楠木さん・・・」

「確かにお前はレベル0だ。そりゃ、御坂や白井達と比べりゃ出来ることは

はるかに少ないかもしれない。だが、それが何だ。」

「えっ・・・」

「完璧な人間なんていやしない。誰にだって出来ないことぐら
いある。」

それは御坂達も同じだ。あいつらには出来なくてお前に
出来ることだってたくさんある。だから、レベル0を負い目
にする必要はない。

もしお前をそんなレベル何ぞで馬鹿にするような奴がいたら、
俺がぶっ殺してやる。

人の価値はレベルなんつーもんで決らんねえんだよ。」

「っ!!!・・・ありがとう、楠木さん。」

「よし、それでいい。女は笑顔が一番だ。」

「えへへ・・・そうですね。」

「ああ、そうだ。よし！今は何故だかテンションが高いから今から遊ぶぞ！」

「えっ！今からですか！」

「おうよ！俺は今日中にいちごおでんを味わいたいんだよ！と言っ訳で、初春。」

「あはは・・・。」

銀行強盗（後書き）

・・・戦闘シーンだけじゃなくて、他も全部グダグダでした。本当にすいません。

禁書目録（前書き）

どうも、シャククスです。うん、いつになっても戦闘シーンがグダグダです。

禁書目録

銀行強盗の事件から三日が経った。

今日は確か上条さんがインデックス禁書目録と会う日だったな。

これは関わっておいて損はない。魔術師とも関わっておきた
いし。

「和真さん、ご飯できたよ。」

「ああ、今行く。」

それにしても、こいつの料理は本当に美味しいな。今度店でも
出してみようかね。

「和真さん、今日の予定は？」

「うーん、午後は予定がぎっしりだな。午前は何も無いが、そ
れがどうした？」

「えっと・・・その・・・買い物に付き合っ
て欲しいな
って・・・」

ああ、そういえばコイツとどこかに行ったりとかしてなかつ
たな。

まあ面倒くせえから行かなかっただけなんだが、
でもたまにはいいか、家族らしいことも。

「ああ、いいぞ。」

「本当!!やった!!」

うれしさのあまり飛び跳ねる凜。いやあ、癒されるなあ。

「んで、何を買った?」

「えっと・・・服とか。」

「そうか、じゃあセブンスミストでいいか。それじゃ行くぞ。」

「うん!!」

「うん、こっちの服もいいなあ。」

今俺は凜とセブンスミストにいる。どうやら凜はどの服がいいか悩んでるらしい。

好きなのを好きなだけ買ってもいいといったのに・・・ちなみに銀行に入ってた金は

十桁を軽く超えていた。そして今は、ベンチで座って携帯で当麻と話していた。

「何のようだ?」

『いや、ちょっとすごいことが起きてな。』

「すーいーとー。」

『なんと、うちのベランダにシスターさんがいたんだよ!』

「ふうん。」

『反応薄!??もっと驚かない普通!??』

「んなこと言われてもなあ(知ってるし)。」

『はあ・・・まあいいや。それより、そいつが妙なことを言うてたんだ。』

「妙なこと?。」

『ああ、なんか追われてるとか、10万3000冊とか、魔術師とか・・・』

「ふうん・・・ちよつと興味出てきた。

あとでお前んちにいつていいか?(もともと行くつもりだったけど)」「

『えっ、ああ、別にいいけど・・・』

「じゃあ、また後でな。」

『おう。』

電話切った和真の下に、凜が来た。

「決まったのか？」

「この二つで迷ってて・・・」

「だからどっちも買っていていって言ってるだろ？」

「和真さんに決めてもらいたいです！」

・・・なんかいきなり怒鳴られたんですけど。何かしたか俺？

「・・・分かったよ。だったら、こっちの無地の方がいいんじゃないか？」

お前は可愛いから、服は質素の方がおまえ自身に合ってるな。

「かつ！かわつ！」

「ああ、お前はすごく可愛いよ。」

「つ！！！！！！」

凜の顔が真っ赤になった。いやあ、本当に癒されるなあ。

ずっと見ても飽きない。

「で、どっちにするんだ？」

「ふえええええ。」

ダメだこりゃ、完全に壊れてる。少しやりすぎだな。

「じゃ、じゃあ、どっちも買ってくるよ。」

「はははははー！」

……ちょっとあの壊れ方は怖いな。

セブンスミストを後にした俺は、凜と別れ当麻の寮に向かっていた。

「よし、やっと魔術師に関われる。」

などと言っていたら、後ろから声をかけられた。

「よ、和真。」

「ん？ああ、当麻か。それで、そのシスターはどこにいるんだ？」

「それがそそくさとどっかに行っちゃって。でも、忘れ物していったからまた戻ってくると思う。」

「そうか。それにしても、魔術師ねえ。」

「ああ、俺もまだ疑っている。でもあいつが不思議な力を持つ

ていることは確かだ。」

「？」

「俺があいつの右手で服に触れたとき、服が破れたんだ。

俺の右手はあらゆる異能を打ち消せるから、

多分その服に異能の力が備わっていたんだと思う。」

「ふうん……てか、お前は女の子の服をめちゃくちやに破ったのか。」

「いや、あれは事故だ！本当に異能の力があるとは思わなかったんだよ！」

はいはい、ラッキースケベは健在だな。そう言ってる間に、当麻の部屋がある階についた。

すると、清掃ロボットが当麻の部屋の前に群がっていた。

「……お前の部屋、そんなに汚いのか。」

「ちゃんと掃除してるよ！でも、なんであんなことになってるんだ？」

インデックスが血まみれで倒れてるんだよ上条さん、と心の中で思っていると、

当麻もそれに気づいた。

「っ！！インデックス！！」

急いで駆け寄る当麻。てかお前、スタートダッシュ速えなおい。

「何でこんな・・・」

「そいつがお前の言っていたシスターさんか？」

「ああ、そうだ・・・でも、何でこんなことに！」

確かにすげえなこりゃ。背中ざっくりいってんじゃないか。神裂さん、やりすぎでしょ。

「ちくしょう、誰がこんなことを！」

「うん？僕達、魔術師だけど？」

俺と当麻が振り向くと、赤いロン毛でタバコでバーコードな魔術師がいた。

「ふうん、神裂が斬ったとは言っていたが、こりゃまたずいぶんと派手にやったもんだねえ。」

内心めっちゃ焦ってるくせに。まったく、魔術師ってのは感情を隠すのが上手いな。

「なんで、こんな・・・」

「うん？忘れ物でもしたんじゃないかな？フードをかぶってなかつたし。」

「まさか、コイツは俺を巻き込まないために……ばつかな野郎!」

そう言っつて、当麻は赤髪の魔術師を睨む。

「おいおい、そんな怖い顔で睨まれても困るよ。それをやったのは、僕じゃないし。」

神裂だつて、そこまでするつもりはなかったんじゃないかな。話は終わりだよ。分かったらさつさとそこをどいてくれ。それ、回収するから。」

「回……収……だと。」

「そう、回収だよ回収。正確には、その10万3000冊の魔道書だけだね。」

「てめえ……。」

「さて当麻、お前はそいつを連れて逃げる。」

「でも!」

「でもクソもない。今はそいつの命が最優先だ。分かったらさつさと行け。」

「……分かった。死ぬんじゃないぞ!」

「ああ。」

……死ぬんじゃないぞって、熱血漫画の定番だよな。

まさか生で聞けるとは、さすが上条さんだな。

「ふう、まったく。君達は何故あれを助ける。あれはただの他人だろ？」

「まあそつだな。俺に関しちゃ、話したことすらねえし。」

「じゃあ何故？」

「知らん、ただの気まぐれだ。お前だつて気まぐれでそつすることあるだろ。」

なあ、炎の魔術師のステイル＝マグヌスくん？」

「っ!?!」

「おいおい、何故それをみたいな顔すんなよ。ネセサリウスは結構有名なんだろ？」

「……何者だ君は？」

「何者つて言われても、俺は俺だ。それ以外に答えようがない。」

「教える気はないみたいだね……」

「そんなことより、やるならさつさとやろうぜ。」

「まあそつだね……さつさと回収したいし。」

すぐにおわらるとしよつ。fortiss931!」

「魔法名か。」

「そこまで知ってるのかい。本当に何者だい？」

「だから俺は俺だ。さっさと来い。」

「ふん。」

ステイルが右手を出した。するとその手の平から火が出てきた。

「あれが魔術か。確かに、能力とは違った感じだな。」

「炎よ……巨人に苦痛の贈り物を！」

などと言いながら、炎をこちらに放ってきた。

「（っーか、あれ言う必要あんのか？完全に厨二病じゃねえか）」

などと考えていたら、俺の周りが爆発した。

「ちよつとやりすぎたかな？まあでも、あそこまで知っていたらどの道始末されるかな。まあいいや。今はあれの回収が最優先だ。」

そう言って、ステイルはその場を去ろうとしたが……

「どこに行く気だ？」

「っ！！」

ステイルが振り向くと、和真が無傷で立っていた。

「・・・どうやってかわした。」

「横にひよいっと。」

「・・・君は思った以上の化け物だったようだ。」

「化け物ねえ・・・まあ、褒め言葉として受け取っておこう。」

「これは、僕も本気を出さないといけなくなってしまった。」

「本気・・・魔女狩りの王か。」
イノケンティウス

「やはり知ってるか。なら、その力も知っているだろう？
逃げることを勧めるけど。」

「ふん、俺は勝てるからここにいるんだよ。」

「その過信が、自分の身を滅ぼすことになるよ。」

「じゃあ、やってみろ。お前こそ、その過信が自分の身を滅ぼすことになる。」

和真が言い終わると、ステイルが構えた。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの火よ
それは生命を育む恵みの光にして邪悪を罰する裁きの光なり。
・・・」

「・・・これ言ってる間に攻撃されたらどうするんだろ。結構
長いよなこれ。」

今俺コイツ楽に殺せるだろ。・・・っと、もうすぐ終わるな。

「顕現せよ！我が身を食らいて力と為せ！！」

すると、ステイルの後ろに人型の怪物？みたいなのが現れた。

「はあ、、すげえ迫力だな。」

「そんなこと言ってる暇はないよ！」

とステイルが言うと、イノケンティウス魔女狩りの王が襲ってきた。

「水遁・水龍弾の術！」

和真はイノケンティウス魔女狩りの王よりもさらにでかい水龍を作り出した。

「（初めて忍術を使ったが・・・最高だな、勝手に手が印を結
んでくれるし。」

しかも手軽で威力も抜群だ。」

水龍は、イノケンティウス魔女狩りの王を飲み込んだ。

「なっ！！！」

「おお、消えた消えた。やっぱり炎なんだな。」

などと言っていたら、インケンティウス魔女狩りの王が再生した。

「ふん、何をしたかは知らないが、ただの水ではいくらやっても無駄だ。」

「ばか、狙いはその怪物じゃねえよ。」

「何？」

「そろそろ、インクが落ちるころかなあ。」

「インクだと？」

「そうだ。俺が狙ったのはその怪物じゃない。
この寮に張られまくってるルーンの紙だ。」

「っ！！・・・だが、水程度では、破れたりはしない。」

「だから、言っただろうが。そろそろインクが落ちる頃かなあ
って。」

「・・・！」

「そうだ。紙は破れなくてもインクは落ちる。
馬鹿の極みだな。ラミネート加工ぐらいしとけよ。」

「くっ・・・！」

「さあ、どうする。今なら見逃してやってもいいが。」

「ちっ……。今日は退かせてもらう。」

「ああ、そうすることを勧める。」

そういつて、ステイルは姿を消した。

それから俺は帰路に着いた。電話で当麻から、インデックスが助かったという情報を聞いた。超うれしがってたな。

インデックスに礼させるから今度またとか言ってたな。……礼させるって、お母さんかあいつは。

などと考えながら家に着いた。

「ただいまー。」

「えへへへへへへへ。」

……こいつはまだ壊れていたのか。

禁書目録（後書き）

・・・疲れてきました。

聖人と第零位（前書き）

どうも、シャムクスです。やっと神裂さん登場です。

聖人と第零位

和真は今、第七学区の自販機の陰に隠れていた。

「（いやあくそれにしても、聖人つてのは意外とすげえな。）」

和真の目線の先では、当麻とエロウエスタンサムライガールが戦っていた。

「（やっぱりあいつめっちゃ美人だよな。ミスユニバースで優勝できるんじゃないか？）」

・・・っと、そろそろ行こっかな。」

「そろそろ、終わりにしましょう。」

「くそ……。」

神裂は、手に持っている七天七刀の鞘で当麻を気絶させようとしたが……

ガシッ！

「「！」「」」

当麻と神裂の間に少年が割り込み、鞘を受け止めた。

「和真!」

「逃げる。こいつはお前では勝てない。」

「確かにそうかもしれないけど!」

「分かってんならさっさと行け。」

お前がやられたらあのシスターは誰を頼ればいいんだよ。」

「!!!・・・分かった。頼んだぞ!」

「・・・ふう、やっと行ったか。」

「・・・誰ですか?」

「ん?なんだ、スタイルから聞いてねえのか?」

「・・・なるほど。貴方がスタイルが言っていた人ですか。」

「楠木和真だ。宜しくな。」

「・・・神裂火織です。質問がいくつかあります。貴方は何者ですか?」

「またそれか・・・だから、俺は俺だ。それ以外答えようがない。」

「・・・そうですか。では、何故貴方は我々のことをそこまで知っているのですか？」

「何故って、それは・・・俺だからじゃねえか？」

「・・・。」

「その沈黙やめてくれ。俺が馬鹿に思えてくるから。」

「・・・貴方は私のことも知っているのですか？」

「無視かよ・・・まあ知ってるよ。ネセサリウスの魔術師で聖

人で

天草式の元女教皇フリエステスつてことぐれえしか知らないけど。」

「ほとんどじゃないですか。」

「ほとんどじゃねえだろ。スリーサイズとかは知らねえし。」

「それを知っていたら変態です！・・・まあいいです。それより、何故私達の邪魔をするのですか？」

「うん・・・物語を変えるためかな。」

「物語？何のことですか？」

「別に分からなくていい。それより、どうする？ここから立ち去るなら見逃すけど。」

「・・・ステイルはやられたようですが、私は聖人です。」

その意味が分かってそのようなことを言ってるのですか？」

「当たり前だ。魔術師だろうが聖人だろうが、その程度じゃ俺を倒すには足りねえんだよ。」

「そうですか……」

少しの間、沈黙が訪れた。そして、先に動いたのは神裂の方だった。

「七閃！！」

神裂は七天七刀を動かし、七本のワイヤーを操作して和真にぶつけようとする。

しかし、和真はそれをすべて避けた。

「ひゃー、あぶねえ。」

「身体能力だけで七閃をすべて避けるとは……ステイルが言っていたように、

想像以上の化け物ですね。」

「聖人のお前に言われたかねえよ。それにまだ唯閃も出してねえくせに。」

「唯閃まで知っているとは……ですが、知っているなら出させる前に終わらせるのが普通じゃないのですか？」

「じゃあ、俺は普通じゃないってことで。」

「そうですね。できれば名乗りたくはなかったのですが……
salvare000!」

神裂が魔法名を言った瞬間、和真の身体が真っ二つになった。

「……………」

神裂が和真の方を見て、少し申し訳なさそうな表情をした。
そして……

「また、罪のないものを殺してしまったって表情だな。」

「っ!?!」

振り向くと、和真が平然と立っていた。

「……………どういふことですか。」

「どういふことって、それを見てみるよ。」

和真は、自分の死体の方を指差した。

神裂もそれに目を向けると、死体が水に変わった。

「……………これが貴方の能力ですか？」

「うん、少し違うな。これは能力ではない。どっちかっつうと魔術に近いものだ。」

「（魔術……ですが、魔力は感じられなかった。つまり超能力でも、魔術でもない……）」

「どうした、もう来ないのか？ だったらこっちから行くぜ。」

「っ……！」

神裂は和真に全神経を集中させた。

「（科学でも魔術でない力……ですが、身体を水にできるくらいでは

唯閃は防ぎきれない。近くに来たところを仕留める！）」

そう考えていた神裂だったが、突如和真の姿が消えた。

「なっ……！」

そして、驚く暇もなく、和真の蹴りが神裂のわき腹に突き刺さった。

「がっ……！」

神裂は十メートルほど飛ばされた。

「……丈夫な女だな。さすがは、聖人といったところか。」

「くっ……（見えなかった、と言うレベルを遥かに超えてい

る。

気がついたら蹴られていた。このままだと……やられる。

「

「うくん……やめた。」

「は？」

「いやね、なんというか……面倒臭くなった。」

「????？」

「だから、もうお開きにしようぜってことだよ。」

「何故……ですか？貴方はあの子を守りたいのではなかったのですか？」

「うくん、別に死んでも守りたいって訳じゃねえし。」

お前と戦ったのは、聖人がどれほどなものか確かめておきたかっただけだ。」

「……………」

「それに、お前ほどの美人を殴ったりすると罰が当たりそうだから。」

「なっ！」

「それと、お前は悪党じゃねえし。」

「そんな理由でやめるのですか？」

「俺にとつちや十分すぎる理由だ。」

「……。」

「じゃあな、歯磨けよ。」

そして、和真はその場から消えた。だが、しばらくするとまた戻ってきた。

「……やはり、まだ続けるのですか？」

「そうじゃない、インデックスのことについてだ。」

「インデックスのこと？」

「お前らは、インデックスの命を救うためにインデックスの記憶を奪い続けてんだっけか？」

「……知っていましたか。」

「当然だ。そして、その行為がまるつきり無駄なことも知っている。」

「……どういふことですか？」

「インデックスは確かに完全記憶能力だ。そのせいでいらんことまで完璧に記憶してしまう。」

「そうです。だから、我々が・・・」

「記憶がパンクする前に、全部消しちまおう。そういうことだな？」

「・・・はい。」

「だが、人間の脳が一年でパンクなんてことは絶対にならない。たとえ、完全記憶能力でもだ。」

「・・・は？」

「だから、お前らは騙されてたつて訳だ。」

「ど・・・どういう・・・ことですか。」

「人間の脳ってのは、それぞれの部位ってものがあったて、それぞれにエピソード記憶、知識記憶などがある。

そして、その記憶は約百三十年分記憶できると言われている。たとえ十万三千冊の魔道書を覚えようが、記憶にはなんら影響はない。」

「ですが、現にあの子は今でも苦しんでいるではないですか！」

「それはお前らの上司・・・おそらくは最大主教が、アークヒシヨッフなんらかの術式を施しているんだろう。」

「そんな・・・まさか。」

「残念だが事実だ。」

「じゃあ、いったいどうすれば……」

「当麻なら救える。いや、せいにかくには当麻とお前らなら救える。」

「あの少年と……私達が？」

「お前らも知っているだろう？当麻の右手には異能を打ち消す力がある。」

「それでその術式を壊せばいい。」

「そしたら、あの少年だけでいいはずなのでは？」

「術式を守るための防御魔術か何かが必要あるはずだ。それは当麻だけでは防ぎきれないからお前らが必要なんだ。」

「……あなたはこないのですか？」

「俺はそういうヒーローってのにはなれない。いや、なるにふさわしくない。」

「そっこのは当麻の役割だ。」

「……何故それを私に教えてくれたのですか？」

「さあ？ただの気まぐれだ。あと、俺は仲間・友達を大切にする奴は好きだからな。」

「……ありがとうございます。」

「ああ、当麻に宜しく伝えといてくれ。」

「分かりました。では、これで。」

そして、神裂はどこかへ行った。

か。

（ふう、とりあえずは成功だな。だが、これからがたいへん・

レベルアップ
幻想御手に錬金術師、そしてアクセラレータ一方通行

・・・・全部関わらないようにしようかなあ。）

聖人と第零位（後書き）

えっと・・・時系列グチャグチャですよ？

幻想御手の始まり（前書き）

どうも、シャククスです。そういえば、当麻が記憶失うのって幻想御手のあとでしたっけ？本当に時系列がグツチャグツチャです。

幻想御手の始まり

「なっつかしいなあ、一七七支部。」

和真は今、ジャケット風紀委員一七七支部の前にいた。

「一週間ぶりぐらいか・・・さて、どこまで進んでるのかな？」

ガチャ

「お、い、久しぶりの楠木さんですよ。」

「楠木さん！いままで何をされてたんですの！」

「ほんと、久しぶりね。クレープのとき以来じゃない？」

入った瞬間、白井と御坂からそんなことを言われた。

「いやあ、俺も色々とおつてな。」

「楠木さんがいないから色々大変だったんですよ！」

「悪い悪い。」

「はあ・・・もういいですね。それより、ちょうどよかったですわ。」

今からわたくしたちと一緒に来てもらいますわ。」

「ホテルにか？」

「んなわけないでしょ！」

「違うのか……」

「何を残念がってるんですの。今から行くのはファミレスですわ。」

「ファミレス？」

「そ。そこで佐天さんと初春さんと木山先生と会う約束をするの。」

「木山先生？」

「その方のお話を少し聞きたいので。」

「ふん……今はそこか。」

「は？」

「何でもない。だが、何故俺も行かにならんのだ？」

「何故って、あんた風紀委員ジャッジメントでしょうが。」

「それがどういう……なるほど、事件に関係してるってことか。」

「そうですね。では、行きますわよ。」

「あれ、楠木さん！」

「楠木さん、お久しぶりです！」

「久しぶり、佐天に初春。」

ファミレスに着くと、既に佐天と初春がいた。

「今まで何やってたんですか？」

「生きるために必死だった。」

「・・・何をしてたんですの、本当に。」

「それより・・・」

和真の目線の先には、一人の女性がいた。

「うーん・・・どっかで見たことが・・・()というか知ってるし)」

「あんだ、この人のこと知ってんの？」

「私は君のことは知らないんだが。」

「……あ、思い出した。木山先生だっけ。」

「何で楠木さんがそれを？」

「さっきこいつらから聞いた。」

「……………」

「とりあえず座ろうぜ。立ってんのはきつい。」

「……そうですね。」

「んで、何の話をするんだ？」

「そう、そうですね。」

「確か、レベルアップ幻想御手という物の話だったかな。」

「そうですね。」

「レベルアップ幻想御手？」

「そうなんです。実は楠木さんが来ていない間の事件で、能力のレベルと被害の大きさがあわないことが多々あったんです。」

楠木さんがいない間に！」

「・・・俺も悪かったと思ってるよ。それで？」

「ええ。調べてみたところ、能力者のレベルを急激に上げる物がありましたの。」

「それが幻想御手レベルアップって訳か。」

「そうよ。でも、問題が発生したのよ。」

「問題？」

「その事件で捕まった人たちが次々と昏睡状態になっているんです。」

「・・・そしてその原因が幻想御手レベルアップとお前達は予想したわけだ。」

「その通りですわ。」

「そして、それを解明するために木山先生に話を聞くことか。」

「・・・それで、どうなんすか木山先生？」

「今のところはなんともいえないな。
どのような形状でどのように使うかも分からないしな。」

「現物もあるかどうか分からないのよ。」

「なるほどな。」

「レベルアップですので、幻想御手をもしもっている方がいたらこちらで保護することにしたの。」

「何で？」

「能力が手軽に、しかも大幅に上がったので犯罪に走ったという可能性のある事件が数件確認されているんです。そして、使用者に副作用がある可能性もありますわ。」

「なるほどね。」

「それで、保護してどうすんだ。拷問でもするのか？
そしたらめっちゃテンション上がるんですけど。」

「そんなわけありませんの。」

ちっ、やらねえか。一回でいいからやってみてえんだよな、

拷問。

目の前で精神が壊れる様を見てみてえんだよなあ。
……って、佐天がそわそわしてるな。

「佐天、どうかしたのか？」

「えっ！いや、何でも……」

と、佐天が焦った瞬間手元にあっただお茶がこぼれ、
木山先生のひざにこぼれた。

「わっ！す、すすすすすいません！」

「いや、気にしなくていい。かかったのはストッキングだけだから、

脱いでしまえば……」

といい、脱ぎ出す木山先生もとい脱ぎ女。

「なっ!!」

「なに脱いでいるんですの!」

「こんなところで脱いじゃダメです!」

「楠木さん、目つぶって!」

と言われた瞬間、佐天に両手で目をふさがれた。

「もう遅いぞ佐天、見てしまった。それと木山先生。」

「?」

「あんた、もっと自分に自信を持ったほうがいい。

誰がなんと言おうとあんたはグラマーだよ。俺が保障する。」

「あんたは黙ってる!」

「お忙しい中ありがとうございます。」

「いや、こちらこそ色々とすまなかつた。

教鞭をふるっていた頃を思い出して楽しかったよ。」

「へえ、教師をしてたんすか。」

「ああ。昔・・・ね。それじゃ、私はこれで。」

「さようなら。」

「うーん、なんというか、不思議な人だったわね。」

「天才はそういうものですわ。」

「そういうのを変人とも言う。」

「顔が真っ赤にはれている人に言われたくないと思うけど。」

「そのはれた原因はお前だろうが。思いつきりビンタしやがっ

て。」

「あんたが余計なことを言うからでしょうが。」

「率直な感想を言ったただけだろうが。」

「あはは・・・それより佐天さん、見せたいものって?」

「えっ！あー、そ、そうだ！あたし用事あったんだ。また今度ね！」

「えっ、ああ、そうですか・・・」

「どうしたんですの？」

「さあ・・・」

「はあく疲れた。なんか久しぶりに仕事したって感じた。」

「疲れたって、あんた何にもやってないじゃない。」

「失礼なことを言うな。ちゃんとやってたぞ。」

「何を？」

「御坂のハートをどうやってたら撃ち抜けるかとか考えてたし。」

「なっ！！！」

「嘘に決まってるだろうが。何動揺してんだ。」

「し、してないわよ！」

「はいはい、そこまでですの。」

もう日が暮れているので、続きはまた明日ですわ。」

「ああ、そうだな。」

「じゃあ楠木さん、また明日。」

「おう。」

夕暮れの道を歩いていると、和真の携帯が鳴った。

「もしもし、どちらさんですか？」

「・・・その間の抜けた応対はやめてくれ。こっちまで気が抜ける。」

「疲れたんだよ・・・それで、何のようだ。」

『仕事だ。今日はとある研究施設で暴れているアイテムの鎮圧だ。』

「アイテムって、あのアイテムか？なんで暴れてんだよ。」

『私にも分からない。』

『あそこのリーダーがひまつぶしでもしているのだろう。』

「・・・麦野か。あの野郎、何考えてやがる。」

『とにかく、頼んだぞ。場所は……』

「ここか……確かに、ちらほら煙が見えるな。」

和真は、とある研究施設の前にいた。

「麦野、ぶっ飛ばす！」

幻想御手の始まり（後書き）

まさかのアイテム登場です。どうしようかと悩みましたが、アイテムが好きなので早く登場させたいという思いが強くなりすぎました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7497z/>

とある転生者の崩壊道（ブレイクロード）

2012年1月6日22時54分発行